

【研究ノート】

カナダ・ウッドランド文化センターにおけるイロクワの文化表象

中村 尚弘

はじめに

近年、社会科学では先住民文化センターが広く研究されてきた (Clifford 1997; 2004; Erickson 1999; 2002; 2003; Simpson 2001; Mauzé 2003; Hendry 2005; Nesper 2005; Cooper and Sandoval 2006; Lawlor 2006; Bodinger de Uriarte 2007; Christen 2007; Isaac 2007; Stanley 2007; Minderhouta and Frantz 2008; Srinivasana et al. 2009; Hoerig 2010)。その主な主張は、合衆国ワシントン州ニア・ベイのマカ文化・研究センターで調査研究を行った Patricia Erickson や概説書ともいえる本を出版した Moira Simpson の言うように、先住民ミュージアムには、先住民コミュニティに文化継承のための素材を提供するとともに、非先住民を先住民の歴史や文化に関して教育をするという二つの目的があるというものである (Simpson 2006; Erickson 1999; 2002; 2003)。筆者は、2004年10月から2006年3月にかけて、断続的にカナダ・オンタリオ州ブランフォード市 (Brantford) のウッドランド文化センターにおいて、北米の先住民であるイロクワがミュージアムを基盤にどのように文化振興活動を行っているのか学習する機会をもった。本稿は、そのときの参与観察やセンター職員への聞き取り・文献調査、および2010年10月に行った補足調査をもとに、先住民文化センターに関して新たな解釈を提示するものである。聞き取り調査は録音したものを筆者がおこし、参加者に内容を点検してもらった上、引用の許可をいただいている。なお、筆者が調査当時に所属していたクイーンズ大学の研究倫理委員会による研究許可の制約上、聞き取り調査の対象はセンター職員に限られた。センターには非先住民職員も在籍していたが、筆者が聞き取りをした11名はすべて自身を先住民であると認めた。また、データの利用や筆者の主張に関して、本稿と英文誌に掲載予定の筆者による他稿との間に一部重複があるが、本稿には日本ではあまりなじみのないカナダ東部の比較的小規模な先住民文化センターの一事例を日本の読者に紹介するという意図もあるので、ご容赦願いたい。

北米における先住民文化センター設立の背景

Lawlorによれば、北米における先住民運営ミュージアムの歴史は19世紀半ばにまでさかのぼるが、現在見られるような先住民居留地の自治行政組織が出資・運営する形態の文化センターが設立されたのは、1960年代である (Lawlor 2006: 18)。1960年代は先住民の社会運動が活発になった時期で、文化センターは、当時の白人主流の北米社会における「先住民は劣った民族である」という認識や、大規模ミュージアムにおける「先住民は過去に生きた民族である」という文化表象のあり方に異議をさしはさむための重要な拠点となった。合衆国においては、連邦政府が先住民運営文化センターを先住民居留地に雇用を創出し、ツーリズム振興にも役立つと考え (Simpson 2001: 136)、カナダにおいては、多文化政策を推進しようとした連邦政府がアングロサクソン、フレンチ以外の民族の博物館設立を支援したこともあり (Tivy 1983)、1970年代以降、先住民文化センターは雨後の筍のように開館が続き、合衆国ではおよそ100、カナダでは50を数えるまでになっている (Lawlor 2006)。

カナダにおいては、連邦政府の民族博物館設立支援とは一見矛盾するが、ピエール・トゥルドー (Pierre Trudeau) 首相による多文化政策と先住民政策への対抗手段として文化センターが

設立されたという背景も無視できない。1968年に首相となったトゥルドーは、先住民権など「集団の所持する権利 (Group Rights)」を認めることに否定的であった。1969年6月25日、トゥルドー政権は「インディアン政策白書 (White Paper on Indian Policy)」を公表、そのなかで「先住民の現代社会における貧困や犯罪などの問題は先住民が法的に特別な地位を持っていることによるものである」と述べ、先住民文化をカナダ多文化主義に統合しようとした (Miller 2000: 331-2)。これに対する先住民の対抗措置は非常に早く、アルバータ州においては、居留地チーフが *Citizens Plus* を発表、カナダが先住民より収奪した土地から得てきた利益に比べれば、カナダ独立以前に宗主国と先住民との間で結ばれた条約に基づく権利 (Treaty Rights) や先住民権 (Indigenous Rights) を認めるコストなど取るに足るものではないとした (Bedard 1991: 38-9)。オンタリオ州では、イロクワおよび同盟先住民機構 (Association of Iroquois and Allied Indians) が *Position Paper* と呼ばれる提言書を発表、その中で先住民による自治政府実現のためには、先住民自身による自文化表象・教育が必要で、その基盤となる先住民運営文化センターの設立が提言された (Association of Iroquois and Allied Indians 1971)。いずれのグループも、先住民はほかの民族マイノリティと異なり、カナダ建国以前からこの大地に生活を営み、フランス・イギリスによる入植やカナダ政府による同化政策の犠牲となり、現代社会における先住民の困窮はそのような歴史的要因を無視できないにもかかわらず、トゥルドー政府にはその視点が決定的に欠けていると反論した。そして、先住民文化はカナダ多文化主義政策の枠組み内に決して統合されるべきではないと主張したのである。その結果、トゥルドー政府は先住民問題に関して無知であったことを認めざるを得ず、「インディアン政策白書」は1973年に撤回された。

ウッドランド文化センター設立は、イロクワおよび同盟先住民機構による *Position Paper* の中で提言されている。オンタリオ州ブラントフォード市には、先住民同化政策の象徴であった寄宿舎学校 (Residential School) のモホーク・インスティテュート (Mohawk Institute) が存在し、1970年に閉校した。ブラントフォードはカナダ最大の先住民居留地であるシックス・ネーションズ居留地 (Six Nations Reserve) に近く、その建物を先住民運営による文化センターとして転用することが計画された。先住民同化政策の象徴であった寄宿舎学校が先住民文化表象のための施設となったことはなんとも皮肉であるが、こうして、ウッドランド文化センターは1972年に設立され、活動を開始した。このように、北米における先住民文化センターの設立には、1960年代から1970年代にかけての社会・政治環境が大きく関係している (Doxtator 1983: 24)。

ウッドランド文化センター (Woodland Cultural Centre) 概要

ウッドランド文化センターは、前節で述べたように北米の先住民社会運動の中で設立された先住民文化センターのひとつで、首都オタワの国立文化センタープログラムから財政援助を受け、2010年現在ワフタ・モホーク (Wahta Mohawks)、タイエンディナガ・モホーク (Mohawks of the Bay of Quinte Tyendinaga)、シックス・ネーションズ (The Six Nations of the Grand River) の三つの先住民居留地によって共同運営される NPO 法人である。センターの役割は、言語・教育・図書・ミュージアムの四つのプログラムを通じて、居留地メンバーに自文化学習の機会やそのための資料、ノウハウを提供することである。三つの居留地からはセンターの運営方針を策定・監査する評議員が8名選出されているが、センター長の Janis Monture によれば、評議員はおおむねセンターの活動に細かく口を挟むことはなく、運営はセンタース

タッフの裁量に任されているという (Monture、聞き取り調査、2010年10月8日)。

さて、センターの内部を探検し、その活動を概観してみよう。センター本部の建物が、もと寄宿舎学校の本ホーク・インスティテュートであり、そこにはミュージアム以外の三つのプログラムが入居している。建物が寄宿舎学校として使用されていたときには、北半分が男児、南半分が女児と厳格に規定されており、互いを行き来することは兄弟姉妹の顔を見ることを含め、許されなかったという。一階の台所や食堂は、寄宿舎学校当時のままになっており、現在でもイベント開催時などには使用されている。

図書プログラムはその名の通り図書室であり、先住民文化や博物館学、人類学に関連する図書、それに北米の博物館・美術館で開催された特別展図録を多数所蔵している。開室中は誰でも利用することができるが、貸し出しは行っていない。言語プログラムは居留地の学校において、モホーク語を初めとする先住民言語を集中的に習得させるための教材やカリキュラム作成を主な業務としている。2004年には活動開始から20周年を迎え、センターの言語プログラムはその功績において、北米では広く評価されている。シックス・ネーションズのうちセネカ (Seneca) を除く五つの言語 (Mohawk, Oneida, Onondaga, Cayuga, Tuscarora) の対英辞典を出版したのも、大きな功績である。

教育プログラムは、少し性格を異なるものとしている。というのは、先述したとおり、センターのプログラムは基本的には居留地メンバーのために提供されるものであるが、教育プログラムはむしろ非先住民教育に果たす役割のほうが大きいからである。2005年当時、プログラムは主任である Bernadette Wabie によって主に運営されていたが、彼女は「居留地には人材や素材が豊富にあるし、私はアルゴンキンでイロクワ文化のことをそのようなところで教える自信はない」という理由で、プログラムを目的として居留地に行くことはないと述べた。彼女の役割はむしろ、オンタリオ州の周辺の公立学校に出向いて先住民文化に関する講演をすること、そして周辺の学校から生徒・児童の校外学習をセンターに受け入れ、講演をしたり文化体験の機会を提供したりすることであった (Wabie、聞き取り調査、2004年12月1日)。オンタリオ州では、日本の小学校3年・6年にあたる学年で先住民について学ぶことが義務付けられており、センターを校外学習に利用する学校は多い。そのようなこともあり、教育プログラムは2009年度には2623人の参加者を受け入れたが、その84%は非先住民であった (Monture、聞き取り調査、2010年10月8日)。残りの16%の参加者も、センターを運営する三つの居留地以外からがほとんどである。このような参加者は、自民族以外の先住民文化の学習や、モホーク・インスティテュート見学のためにセンターを訪れるという。従って、端的に言えば、センターの教育プログラムが運営する三つの居留地に果たす役割はそれほど大きくないのである。

ウッドランド文化センターのミュージアムプログラム

さて、本稿の焦点となるミュージアムプログラムである。ミュージアムは、本部に隣接する別の建物に入っている。中心はイロクワの文化や社会を紹介する常設展示であり、2009年度 (4月から翌3月) の総入館者数は、9378人であった (Monture、聞き取り調査、2010年10月8日)。常設展示は、1982年から2005年までミュージアム・ディレクターを務め、美術史の専門家でもある Tom Hill による制作で、その構成は細かな更新を除き、1982年以来大きくは変わっていない。展示は、シックス・ネーションズを中心としたイロクワの社会・文化を15世紀から20世紀まで、時代を追って紹介する構成となっている。館内にはあまり文章による解説がないので、受付で展示案内 (Froman 2005) を借りて参照しながら見学したほうがよ

い。筆者の知る限り、英語以外にフランス語・ドイツ語・オランダ語・日本語・中国語が用意されており、日本語は筆者が翻訳したものである。

最初の展示は、15世紀の「典型的な」イロクワ集落の土器のかげらやミニチュア、絵画による復元である。ここでは、イロクワ社会では女性が農業の中心的担い手であったことが説明され、伝統的な家屋であるロングハウス内部の煙が充満し、薄暗い様子もうかがい知ることができる。その当時、ナイアガラ半島西部に定住していた民族は、イロクワの一民族であるニュートラル (Neutral) であった。センター作成の展示案内には触れられていないが、ニュートラルの自言語による呼称はチョノントン (Chonnonton) であり、ニュートラルとはヒューロンとシックス・ネーションズとの間に位置した彼らが中立を保とうとしたことから、フランス人によりつけられた名前である。

次の展示は、1626年、フランス人宣教師のデイロン (Father Joseph de la Roche Daillon) がキリスト教布教のためにニュートラルの村を訪れたときの様子である。デイロンは等身大の人形として置かれ、背景のよそ者を見に集まったニュートラルの村人たちは、モホーク芸術家の Bill Powless により描かれた。ヨーロッパ人の文字による記録が始まったという観点から、教育プログラム参加者に対して、その是非は別にして 1626年はこの地域の「歴史の始まり」という説明がなされることもある。いずれにしても、ヨーロッパ人ははしかや天然痘などの病気もこの地に持ち込み、免疫のなかったニュートラルは大打撃を受け、ヨーロッパ人との接触から 50年を経ないうちにその集落はほとんど消滅してしまう。そして、それからおよそ 200年の間ナイアガラ半島西部は無人の地となった。

次の展示は、イロクワとフランス人・イギリス人との間の毛皮交易である。ビーバーの毛皮のほか、イロクワが交易で手に入れたビーズや聖書、銅器などが展示されている。もっとも、イロクワは聖書の内容には価値を見出さなかったため、紙の束はむしろ盾として使われ、ヨーロッパ人が先住民を「野蛮な人種」であると見下す原因ともなった。次いで、イギリス人入植者とイロクワとの間に結ばれた条約の解説、条約の証となった白と紫の貝殻を糸で結んで作られたワンパムベルトが展示されている。それから、イロクワの森林資源の利用方法を説明するための数々の木工品が並べられ、そのあとにはイロクワの木製仮面がガラスケース内に陳列されている。イロクワの仮面は美術品や工芸品ではなく、非常に神聖なものであるという認識が広まったため、北米のミュージアムでは、一般の観覧者の目に触れられるような形で展示されることはほとんどなくなった。しかし、センターでは「木の幹から切り離されるまでは魂がこめられていない」という解釈のもと、掘り込まれた木の幹ごと展示されている。

次は、1776年のアメリカ独立革命である。当時、オンタリオ湖南岸、現在のニューヨーク州に定住していたシックス・ネーションズは、内部分裂寸前までいく激しい意見対立の後、アメリカ人入植者により土地が奪われることを恐れ、イギリス側について戦った。そのため、アメリカが独立達成の後にアメリカ人からさらなる攻撃を受ける結果となり、ジョセフ・ブラントの指導の元、ナイアガラ半島西部に命からがら逃避、グランド・リバー両岸にイギリスのハルディマンデ公 (Haldimand Deed) より 1784年、定住地を与えられた。センターの常設展が紹介しているのはアメリカ独立革命の別の一面であり、展示されているのはジョセフ・ブラントの大きな肖像画とイロクワの移住を説明する地図である。

その後、キリスト教のイロクワ社会への影響、ヨーロッパの影響による奴隷制度の導入、伝統的なロングハウスの現代社会での役割が説明され、20世紀前半における白人主流の社会で功績を挙げた人物が紹介される。その例は、ボストンマラソンで活躍したトム・ロングボート、

芸能界で活躍したポーリン・ジョンソンである。さらに、ニューヨークのエンパイア・ステート・ビルディングやトロントの CN タワー建設に携わったイロクワの鉄工の業績が紹介される。そのあとは、先住民への偏見に関する展示である。巨大な「インディアン・トーテムポール」や、ヘッドドレスをかぶった「インディアン酋長」のポスター、先住民を野蛮な民族として扱ったワイルド・ウェスト・ショーのポスターなどが展示されている。トーテムポールやヘッドドレスは北米の中でもごく一部の民族のみに見られるものであり、北米の先住民文化を代表するものではない (Francis 1992)。なお、鉄工と偏見の展示は、後述する特別展の成果を常設展示に組み込んだものである。

最後は、イロクワとアルゴンキンとの文化のちがいがマネキンに着せられた装束などで紹介され、「パン・インディアニズム」という概念の説明で常設展の締めとなる。「パン・インディアニズム」とは、北米に多数存在する先住民族間の文化的多様性を認識する一方で、共有する負の経験である植民地主義や同化政策などに対しては結束して対抗していこうとする考え方である。同様の概念は、「パン・アフリカニズム」、「パン・ラテンアメリカニズム」など他の地域にも見られる。その後は、特別展のための展示室へと順路が続く。

ウッドランド文化センターの常設展示で強調されていることは、先住民社会も非先住民社会と同様に時間を追って変化するということである。先住民族は決して過去の存在ではなく、「歴史のない民族」でもない (Wolf 1982)。それとともに、先住民芸術の豊かさも前面に押し出されている。展示の背景は現代芸術家が描き、肖像画が多く使われ、木工品も見方を変えれば美術品である。北米の美術館ではヨーロッパ系芸術家による作品のみが「美術」とみなされ、博物館では先住民の「伝統的な」文化の展示のみを持ってよしとしていた 1980 年代前半においては、斬新的な先住民文化の展示手法であったと考えられる (Martin 1991; Jessup 2002)。

ついで、センターの企画してきた特別展にも紹介しておきたい。筆者が主なフィールド調査をしていた 2004 年から 2005 年にかけては、センターの財政難が一因で図録があまり出版されず、2005 年に Tom Hill がセンターを退職してからは他の博物館との共同事業を行うことも少なくなったこともあり、本稿で紹介するのは Tom Hill が企画に大きく関わり、図録など情報も容易に入手できた 1990 年代のものが中心である。

一番に紹介すべきは、1975 年より毎年開催されてきた芸術展である。当初は Indian Art Show と呼ばれ、1990 年からは、First Nations Art Show と呼称を変えている。これは、カナダではヨーロッパ人によりつけられた Indian という言葉が嫌われ、先住民族の多様性やカナダに初めて定住した民族であることを強調する First Nations が好まれるようになったことを反映したものである (Hill 1990: 5)。合衆国では Indian はいまだに広く使われ、2004 年に首都ワシントン DC に開館したスミソニアン博物館も National Museum of the American Indian であるが、カナダでは、連邦政府が公称として使用するほかは、ほとんど使われなくなっている。この言葉を耳にするとしたら、それは非先住民が蔑意を込めて先住民を呼ぶときであり、少なくとも先住民自身が自分たちを Indian と呼ぶことはない。センターの芸術展は、カナダでは先住民現代芸術家に作品発表の機会を毎年提供してきた唯一の展示会である。若手芸術家には特にそのような機会がなかったため、将来性のある芸術家を発掘してきたセンターの功績は大きい (Hill 2003: 2)。また、出品される作品も時代を反映し、1980 年代にはノーヴァル・モリソウ (Norval Morrisseau) の影響も大きくウッドランド・スクールと呼ばれる抽象画が多く見られたが、2003 年にはわずか 2 点となった¹ (Hill 2003: 4)。1991 年の展示会では、前年にケベック州オカでおきたカネサタケ・モホーク (Kaneshatake Mohawk) のゴルフ場拡張に反対した立てこも

り事件を描いた作品も少なからず見られた。芸術展に出品された作品は、当時の社会背景も少なからず反映しているのである (Monture 2005: 2)。

このほかにも、目を引く特別展は少なくない。1987年の『スカイウォーカーズ (Sky Walkers)』は、客員学芸員の Rick Hill により制作され、イロクワの鉄工に関する展示であった。この当時、先住民の物質文化以外に焦点を当てたものはまれで、展示は写真や口承文芸などによって構成された (Hill 1987: 9)。1988年の『綿と羽根 (*Fluffs and feathers*)』(Doxtator 1988) も、客員学芸員の Deborah Doxtator による制作で、これは先住民に対する偏見に関する展示である。この特別展では、常設展示のところで紹介したトーテムポールやポスターのほか、ティーピーと呼ばれるテントハウス、土産物屋のゴミ箱、灰皿、噛みタバコの外箱などまでもが展示された。Doxtator は、展示がどのように観客に受け取られるのか非常に危惧していたという。というのは、この展示は先住民文化が直接の対象ではなく、マジョリティである白人カナダ人の理解の仕方に関する展示であり、彼らへの抵抗のまなざしをも含んでいたからである (Bedard 1988: 5; Francis 1992: 4)。実際にはこの特別展は非常に好評で、センターでの開催終了の後、5年にわたり北米の博物館を巡回することとなった。「インディアン」に対する偏見は、20世紀末に至っても根強く存在しているということが広く観覧者に伝えられたようである (Bouw 1992)。

1988年5月8日には、スミソニアンのアメリカーン・インディアン博物館からシックス・ネーションズに、イギリス人との条約を記録するためにつくられた11のワンパムベルトが返還され、条約の意義と先住民自治システムの重要性に焦点を当てた『協議の火 (Council Fire)』(Woodland Cultural Centre 1989) が翌1989年に開催された。このほかにも、詳述は省略するが、1990年の『ドラムの音 (Sound of the Drum)』や1992年の『夏の光にあたる雪のように (As Snow before the Summer Sun)』(Hill 1992) など、興味深い特別展は多い。いずれも、紹介されている文化的要素が現代社会においてどのような意味を持つかという視点を欠かさないことは注目すべきことである。常設展示同様、先住民文化は過去のみには存在するものではないことを特別展でも強調しているのである。

2001年には、初の本格的な共同事業の成果である『モホークの理想・ヴィクトリアの価値観: ドクター・オロンヤテクハ (Mohawk Ideals, Victorian Values: Oronhyatekha, M.D.)』がトロントのロイヤル・オンタリオ博物館との間で協催された。オロンヤテクハは、カナダで初めて医学位をとった先住民であり、展示はオロンヤテクハのモホークや世界各地から収集された民具を中心に構成された。この事業は、コレクションは持っていたがそれに関する十分な知識のないオンタリオ博物館、オロンヤテクハに興味はあったが十分なコレクションや資金の欠けていたセンター双方のニーズが見合った結果であった (Jamieson 2000: 32-3; Nicks 2003)。これ以外にも、Tom Hill やセンターのスタッフは、スミソニアンなど他のミュージアムに出張して特別展開催に広く関わっている (McLuhan and Hill 1984; Hill and Duffek 1989; Hill and Hill 1994; National Museum of the American Indian 1994; Kasprzycki and Stambrau 2003)。ウッドランド文化センターは、北米のミュージアムネットワークにおいて一定の地位を築き上げており、その点では北米の先住民文化センターの中では屈指のものといえる。

誰による「自文化表象」か

それでは、ウッドランド文化センターは先住民による自文化表象の好例であるといえるであろうか。合衆国南西部のズニ文化センターの事例研究において、Isaac は以下のような疑問

を投げかける。

もしミュージアムが自立の原動力となるのならば、以下のことを考慮する必要がある。誰が指揮を取っているのか。文化や歴史のどの側面が強調されているのか。先住民の誰が部族の歴史家であると認識され、知識を受け継ぐのは誰か。端的に、コミュニティ内で誰が誰に権限を与えているのか。(Isaac 2007: 10、筆者訳)

ウッドランド文化センターの事例では、これらの疑問への答えは何であろうか。先述したように、センターのプログラムは、原理的には共同運営する三つの先住民居留地メンバーのために提供されることになっている。しかし、センター長の **Janis Monture** は、職務についての 2003 年当時、センターの活動と居留地での生活実態との関連の薄さに当惑したという (Monture 2006: 1)。そして、「シックス・ネーションズ居留地に住んでいる人はセンターが何をやっているのか知らないし、そもそもセンターはブラントフォード市にあって、生活圏外だと思われる」と述べる (Monture、聞き取り調査、2004 年 12 月 8 日、筆者訳)。Tom Hill もこのような見解を特に教育プログラムに関して共有していた。

基本的に、教育プログラムの参加者のほとんどは非先住民で、オンタリオが先住民に関することを教育課程に組み入れているからだ。センターは居留地のためにそのようなプログラムを持っていないし、第一、居留地の学校と公的に関係を結ぶよう求められることもなかった。(Hill、聞き取り調査、2004 年 12 月 2 日、筆者訳)

ミュージアムプログラムの意義も、必ずしも居留地メンバーに十分に理解されてきたわけではない。学芸員の **Keith Jamieson** は、2001 年にセンターで『オロンヤテクハ』展を開催した際、展示を見に来た先住民からは「これらの資料は、ロイヤルオンタリオ博物館ではなく、シックス・ネーションズが所有するべきである」との声が聞かれたことを明らかにし、そもそも資料がガラスケースの中に展示されていることに嫌悪感を示すものもいたという (Jamieson、聞き取り調査、2006 年 2 月 15 日)。そして、常設展示のイロクワの仮面は、センターの職員でも「たとえ幹から離されていなくても神聖なものであり、あのような形で外部のものにさらされる必要はない」として展示とりやめを望んでいる。さらに、センターはもとは寄宿舎学校であったにもかかわらず、常設展示からは 2008 年までそれに関する展示が一切欠けていた。すなわち、先住民の二十世紀における重要な史実表象の欠如である。この点に関しては、センターの職員が「Tom Hill による美術を中心としたイロクワの文化表象に、寄宿舎学校という負の遺産が必ずしもじっくりこなかったのかもしれない。あるいは、常設展示のつくられた 1980 年代前半には、まだ記憶が生々しすぎて展示されることが望まれなかったのかもしれない」と述べている (Tara Froman・ミュージアム教育主任、Judy Harris・現ミュージアム・ディレクター、Monture、聞き取り調査、2010 年 10 月 8 日)。これらの事実は、センターの展示にイロクワの文化や歴史、価値観のすべてが表象されているわけではないことを明らかにする。

2005 年のトム・ヒルの退職後、Monture は居留地との関係をより密にするよう努めてきた。共同運営する居留地でのワークショップ開催などを増やし、シックス・ネーションズの全世帯には、定期的にチラシを郵送するなどした結果、センターを訪れる居留地メンバーは増えているという。その代わりに少なくなっているのが、外来者向けのイベント、それに他のミュージ

アムとの共同事業である (Monture、聞き取り調査、2010 年 10 月 8 日)。1972 年の設立後、Tom Hill がミュージアム・ディレクターとなった 1982 年から、ウッドランド文化センターは先住民芸術に関する強力な研究・教育組織となってきた。センターの職員は、Tom Hill の北米ミュージアム界における先住民芸術啓蒙活動を賞賛する。特に、大規模ミュージアムに先住民芸術の専門家が少なく理解も乏しかった 1980 年代では、Tom Hill の奮闘は大変なものであったに違いない (Froman, Harris, Monture、聞き取り調査 2010 年 10 月 8 日)。しかし、彼のセンターや居留地を越えたところでの活動が、センターを居留地メンバーから心理的に切り離し、なじみのない施設となる結果に陥ってきたことは否めない。また、最近ワークショップ開催などでセンターと居留地メンバーとの距離は縮まっているとはいっても、それは展示制作や大規模ミュージアムとの共同事業に居留地メンバーが直接関わるようになったということではない。資料保存、研究、展示などのミュージアム機能を利用して自己表象をするのは、センター職員などごく一部のものに限られている。

おわりに

Erickson は、先住民ミュージアムはヨーロッパ起源の機関を先住民がうまく利用するようになったポスト・コロニアリズムの象徴であると、各所で主張している (Erickson 1999; 2002; 2003)。確かに、ミュージアムという機関がヨーロッパで誕生し、帝国主義の拡大とともに先住民など「他者」を「未開で野蛮な『人種』」として表象し、同化政策の正当化に使われてきたことは広く認識されるようになった (吉見、1992 ; Bennet 1995 ; 吉田、1999)。しかし、筆者は、先住民が自分たちの文化センターを設立して文化表象に利用しているからミュージアムがポスト・コロニアルへと移行していると単純に論を展開することに最近懐疑的である。ウッドランド文化センターの事例が明らかにするように、文化センターを利用して自己表象の場としているのは一部の専門家や芸術家に限られている。また、ウミスタ文化センターやズニ文化センターなどの事例も、内部抗争やミュージアムでの知識伝達方法の受容の度合いにより、先住民全員が文化センターを等しく利用しているわけではないことを明らかにする。Isaac のズニ文化センターの事例によると、内部者のみで共有されるべき知識を学習会など外部者にさらすような形で伝達する文化センターを利用した文化振興方法は、特にズニの長老に忌避されているという。ミュージアムは必ずしも彼らの価値観に適合するものではないのである (Mauzé 2003; Isaac 2007; Minderhouta and Frantz 2008)。また、たとえ展示が先住民学芸員により制作されたとしても、資料保存や展示、それを通じた観覧者の教育・啓蒙といったミュージアムの中心的な機能に、必ずしもすべてのものが理解・共感しているわけでもない。特に、ヨーロッパ起源のミュージアムでの学芸員など一部の専門家・権威者による知識伝達のあり方には、抵抗感を持つものは少なくない。

冒頭で述べたように、先住民文化センターには先住民・非先住民双方に果たす役割があると考えられている。このような主張は、一見正当で、多くの先住民文化センターが目指すところであろう。しかし、それは本当に可能であろうか。というのは、ほとんどの先住民文化センターは小規模で、人員や予算など制約が多い。そもそも北米では、大規模なミュージアムでも先住民文化の展示は先住民との共同事業により制作されることがもはや「常識」となっており、立地や来館者数を比較したら、非先住民の教育に関しては、大規模なミュージアムのほうがよほど効果的である。また、ウッドランド文化センターのように屈指の先住民文化センターでも、異なる二つの層を対象にプログラムを提供するのには限界があったというのは、見てきたとお

りである。

誤解を招かぬよう述べておきたいのは、筆者は文化センターは先住民の文化表象の場として適切ではないと主張しているのではない。ウッドランド文化センターでのフィールド調査を通じ、先住民芸術など筆者が学んだことは大きかった。ただ、先住民運営の文化センターだから、先住民の自文化表象の場としてうまく利用されていると、個々の事例を無視して無批判に議論を展開するのは短絡的ではないだろうか。また、先住民はミュージアムを文化表象のために利用すべきであると、(特に非先住民が) 主張することも回避したほうがよい。ミュージアムは有効な方法ではあるが、文化表象や知識伝達の唯一の手段ではなく、利用するかどうかの選択権は当人に所属すべきである。もし、先住民にそのような選択権が与えられないなら、それは新たな同化主義である。

注

1, ウッドランド・スクール絵画に興味のある方は、Norval Morrisseau, Daphne Odjig, Carl Ray といった個人名や Woodland School Painting といった語で画像検索を行ってほしい。モリソウは、ウッドランド・スクール絵画の先駆者である。

謝辞

ウッドランド文化センターの職員の方々から学ぶことは大きかった。この場にて御礼申し上げる。

参考文献

Association of Iroquois and Allied Indians,

1971 *The Association of Iroquois and Allied Indians: Position Paper*.

Bedard, Joanna

1988 Preface. In Doxtator, Deborah *Fluffs and Feathers: An Exhibit on the Symbols of Indianness*, (5). Brantford: Woodland Cultural Centre.

1991 *The Indian Cultural Educational Centre Program (Its development and services to First Nations and the public)*. Unpublished Master's thesis in the Faculty of Environment Studies, York University.

Bennett, Tony

1995 *The Birth of the Museum: History, Theory, Politics*. London and New York: Routledge.

Bodinger de Uriarte, John J.

2007 *Casino and Museum: Representing Mashantucket Pequot Identity*. Tucson: The University of Arizona Press.

Bouw, Brenda

1992 Exhibit Showing Exploration of Natives is Popular. *Brantford Expositor*. 12 December 1992.

Christen, Kimberly

2007 Following the Nyinkka: Relations of Respect and Obligations to Act in the Collaborative Work of Aboriginal Cultural Centers. *Museum Anthropology*, 30 (2), 101-24.

Clifford, James

1997 Four Northwest Coast museums: Travel Reflections. In, James Clifford, *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century* (107-146). Cambridge and London: Harvard University Press.

2004 Looking several ways: Anthropology and Native heritage in Alaska. *Current Anthropology*, 45, 5-30.

Cooper, Karen Coody and Nicolasa I. Sandoval (eds.)

2006 *Living Homes for Cultural Expression: North American Native Perspectives on Creating Community Museums*. Washington DC. and New York: National Museum of the American Indian.

Doxtator, Deborah

1983 *Iroquoian Museum and the Idea of the Indian: Aspects of the Political Role of Museums*. Unpublished Master's thesis in the Department of Museum Studies, University of Toronto.

1988 *Fluffs and Feathers: An Exhibit on the Symbols of Indianness*. Brantford: Woodland Cultural Centre.

- Erickson, Patricia Pierce
 1999 A-whaling We Will Go: Encounters of Knowledge and Memory at the Makah Cultural and Research Center. *Cultural Anthropology*, 14, 556-83.
 2003 Welcome to this House: A Century of Makah People Honoring Identity and Negotiating Cultural Tourism. *Ethnohistory*, 50, 523-47.
- Erickson, Patricia Pierce with Helma Ward and Kirk Wachendorf
 2002 *Voices of a Thousand People: The Makah Cultural & Research Center*. Lincoln and London: University of Nebraska Press.
- Frances, Daniel
 1992 *The Imaginary Indian: The Image of the Indian in Canadian Culture*. Vancouver: Arsenal Pulp Press.
- Froman, Tara
 2005 (first edition 1999) *The Woodland Cultural Centre: Self-Guided Tour*. Brantford: Woodland Cultural Centre.
- Hendry, Joy
 2005 *Reclaiming Culture: Indigenous People and Self-Representation*. New York: Palgrave Macmillan.
- Hill, Dawn J. (ed.)
 1992 *As Snow before the Summer Sun: An Exhibit on our Relationship to the Natural Environment*. Brantford: Woodland Cultural Centre.
- Hill, Tom
 1987 Introduction. In Hill, Richard *Skywalkers: A History of Indian Ironworkers* (9). Brantford: Woodland Indian Cultural Education Centre.
 1990 Preface. In *First Nations art '90* (5). Brantford: Woodland Cultural Centre.
 2003 Introduction and Acknowledgement. In *First Nations art '03* (3-4). Brantford: Woodland Cultural Centre.
- Hill, Tom and Karen Duffek (eds.)
 1989 *Beyond History*. Vancouver: Vancouver Art Gallery.
- Hill, Tom and Rick W. Hill (eds.)
 1994 *Creation's Journey: Native American Identity and Belief*. Washington DC and London: Smithsonian Institution Press.
- Hoerig, Karl
 2010 From Third Person to First: A Call for Reciprocity among Non-Native and Native Museums. *Museum Anthropology* 33 (1), 62-74.
- Isaac, Gwyneira
 2007 *Mediating Knowledges: Origins of a Zuni Tribal Museum*. Tucson: The University of Arizona Press.
- Jamieson, Keith
 2000 Oronhyatekha. *ROTUNDA: The Magazine of the Royal Ontario Museum*. Fall 2000: 32-37.
- Jessup, Lynda
 2002 Hard inclusion. In Jessup, L. with Bagg, S. eds. *On Aboriginal Representation in the Gallery* (xiii-xxx). Hull: Canadian Museum of Civilization.
- Kasprzycki, Sylvia S. and Doris I. Stambrau (eds.)
 2003 *Lifeworlds – Artscapes: Contemporary Iroquois art*. Frankfurt am Main: Stadt Frankfurt am Main Museum der Weltkulturen.
- Lawlor, Mary
 2006 *Public Native America: Tribal Self-Representation in Museums, Powwows, and Casinos*. New Brunswick, New Jersey and London: Rutgers University Press.
- Martin, Lee-Ann
 1991 *The Politics of Inclusion and Exclusion: Contemporary Native Art and Public Art Museums in Canada*. Ottawa: Canada Council.
- Mauzé, Marie
 2003 Two Kwakwaka'wakw Museums: Heritage and Politics. *Ethnohistory*, 50, 503-22.
- McLuhan, Elizabeth and Tom Hill (eds)
 1984 *Norval Morriseau and the Emergence of the Image Makers*. Toronto: The Art Gallery of Ontario.
- Miller, J.R.

- 2000 *Skyscrapers Hide the Heavens: A History of Indian-White Relations in Canada. Third Edition.* Toronto, Buffalo and London: University of Toronto Press.
- Minderhouta, David J. and Andrea T. Frantz
2008 The Museum of Indian Culture and Lenape Identity. *Museum Management and Curatorship*, 23 (2), 119-33.
- Monture, Janis
2005 Foreword. In *First Nations art '05* (2). Brantford: Woodland Cultural Centre.
2006 With the Communities in Mind. *WADRIHWA: Quarterly Newsletter of the Woodland Cultural Centre*. 20 (4) & 21 (1), 1.
- National Museum of the American Indian (ed.)
1994 *All Roads are Good: Native Voices on Life and Culture.* Washington DC: Smithsonian Institution.
- Nesper, Larry
2005 Historical Ambivalence in a Tribal Museum. *Museum Anthropology*, 28, 1-16.
- Nicks, Trudy
2003 Museums and Contact Work: Introduction. In, Laura Peers & Alison Brown (eds.) *Museums and Source Communities* (19-27). London and New York: Routledge.
- Simpson, Moira G.
2001 *Making Representations: Museums in the Post-Colonial Era. Revised Edition.* London and New York: Routledge.
2006 Revealing and Concealing: Museum, Objects, and the Transmission of Knowledge in Aboriginal Australia. In, Janet Marstine (ed.) *New Museum Theory and Practice: An Introduction* (152-177). Malden, Oxford and Victoria: Blackwell.
- Srinivasana, Ramesh, Jim Enoteb, Katherine M. Becvara and Robin Boast
2009 Critical and Reflective Uses of New Media Technologies in Tribal Museums. *Museum Management and Curatorship*, 24 (2), 161-181.
- Stanley, Nick (ed.)
2007 *The Future of Indigenous Museums: Perspectives from the Southwest Pacific.* New York and Oxford: Berghahn Books.
- Tivy, Mary
1983 The Trend toward Specialized Museums in Ontario. *Museum Quarterly*, September, 19-24.
- Wolf, Eric R.
1982 *Europe and the People without History.* Berkeley, Los Angeles, and London: University of California Press.
- Woodland Cultural Centre
1989 *Council Fire*, Brantford: Woodland Cultural Centre.
- 吉田憲司
1999 『文化の「発見」—驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』 岩波書店。
- 吉見俊哉
1992 『博覧会の政治学—まなざしの近代』 中公新書。

(なかむら・なおひろ／カナダ・マウントアリソン大学地理・環境学科)